

保育者と父母を結ぶ雑誌

2006年4月17日第3種郵便物認可
2021年8月1日(毎月1回1日)発行

【特集】

みんなで育つ！
『ちいさいなかま』
創刊50周年

これまでも、これからも
子どもの笑顔のために

ちいさい なかま

8月号

2021—NO.711

みんなで祝おう！
創刊50周年



実践を書くこと、
読むことの意味

——杉山隆一

コロナ禍が教えてくれる
「つながり」の力

——中西新太郎

『ちいさいなかま』が生まれたとき

上野さと子 全国保育団体連絡会副会長

せんせいは たいちょうだね
(どうして?)

だって めいれいするもん

このことばに、思わずわが身を振り返らなければならない私でした。

(第1回全国保育団体合同研究集会速報より)

1969年8月、日本の保育関係者がはじめて一堂に会した全国保育団体合同研究集会(合研集会)が長野県山ノ内町において開かれました。「よい保育・子育てがしたい」願いのもとに集まった2000余名は、それぞれが抱えている問題などを話しあい考えあうなかで、悩んでいるのは自分だけではないことや、はじめて聞くような創造的な実践や運動・研究にふれて、全国的に交流し、学びあうことの大切さを実感しあったのでした。

第2回合研集会が大成功したあと、「日常的に学びあえる月刊誌がほしい」ことが熱く話しあわれ、次の年の集會に創刊することが決められたのです。

雑誌の名前は、「子どもは幼いときから“なかま”を求め、おとなの運動もちいさいなかま(子ども)から出発し、二人三人と大きな連帯がつくられていく。全国のなかまを結び、運動を発展させる“ちいさいなかま”…そんな気持ちがこめられて決まりました。

みんなでつくり、みんなでひろげ、育てる雑誌

発行当時、委託した出版社から「A5判64頁で定価は150円になる」と言われました。そのとき、身近な雑誌であった『子どものしあわせ』は80円(草土文化)、『保育の友』は120円(全国社会福祉協議会)だったので、「150円なんて高すぎる」という心配の声もありました。しかし、「みんなでつくり、みんなで育てる雑誌だから、少々の困難はみんなでのりこえよう」と、固く決意しあってスタートしました。

創刊号には、「子どもは、なかまといっしょにいるから成長できるのだと、1歳8か月の息子を無認可保育所に預けている私は勇気づけられまし

た」「保育がマンネリ化していたのですが、読んで刺激を受け、ぼんやりしていた目がさめました」などの反響がよせられました。4000部の出発でしたが、「本音がかかっている」「保育者・保護者・研究者などいろんな考え方に学べる」などが、人から人へと伝えられ、9年後には8万部を超えて全国各地にひろがっていきました。

保育者と保護者を結ぶ雑誌

合研集会や『ちいさいなかま』が誕生した当時は、働く女性の間で「保育所がほしい」という要求が日本中に広がる一方で、政府の労働政策による「母親は家庭に帰れ」「3歳までは親が育てるべき」など乳児保育否定論が大勢を占めていました。しかし、保育者たちは保護者とともに、幼い子どもたちが友だち同士のふれあいのなかでいきいきと成長、発達している実践を交流し、学びあひながら集団保育の優位性を確かめあってきたのです。

そして、保育者と保護者が子どもを真ん中にして、よりよい保育の実現を求めて積み重ねてきた保育運動は、政府の乳児保育否定論を打ち破る力となり、保育所は国民生活にとって必要不可欠な社会的施設となりました。さらに今日、待機児童問題を政府が国の重要課題にせざるを得ないところまで歴史をおしすすめてきたといえます。

そうした歴史とともに歩んできた『ちいさいなかま』は、創刊50周年を迎えます。常に、働くことと子育ての両立に悩みながら子育てするお母さん・お父さん、家庭で一人で懸命に子育てするお母さん、わが子ともしっかりあいたいと思っている忙しいお父さん、そして大好きな子どもたちのために日々豊かな保育を模索する保育者・職員のみなさんが、もっと強く結びつくことを願ってつくられてきました。

『ちいさいなかま』は、大企業の資本のもとでマスコミが宣伝をしたり、書店に山積みされたりはしていません。読者の手に渡るまでには、各地の保育団体や保育園・幼稚園など『ちいさいなかま』の魅力を知らせ、注文をとり、読者に配り、集金をするなど、たくさんの手間がかけられます。そんな手間をかけることが運動を支え、子どもを大切に育てるおとなのつながりを強めているのです。

このちいさな雑誌を、一人ひとりの手でもっともおおきく育て、保育者と保護者を結ぶ絆をしっかりと作り、勇気や元気、希望をもちあえる子育ての輪を大きく広げていきましょう。